

# 自助、共助、公助高めて

こうした行動をひとまとめにした警報発令時のルールを自分で決めてほしい。

西日本豪雨により甚大な浸水被害が出た倉敷市真備町地区では、犠牲者の約9割を高齢者が占めた。なぜ避難できなかったのか。命を守るための鍵は何か。兵庫県立大の木村玲欧准教授(49)が防災心理学に聞いた。(大橋洋平)

高齢者に被害が集中した理由は三つあると考えられる。一つは身体的な問題。足腰が不自由だと避難が困難で、犠牲者には要介護者が多かったようだ。身体的なハンディから周りに迷惑を掛けたくないと考え、避難がおっくうになった可能性もある。

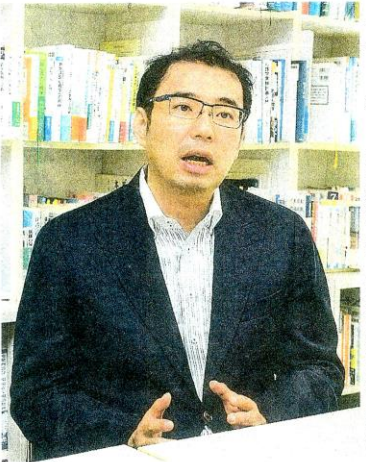
二つ目は情報活用の問題。現在はインターネットでもテレビのデータ放送でもリアルタイムに災害情報を手でできるが、高齢者には情報にアクセスできない人が少なくない。仮に受け取れても、警報や避難に関する情報は多様化しており、適切に理解できないまま災害に巻き込まれてしまっ

三つ目は地域力の問題だ。独居や夫婦のみで暮らす高齢者がいたのかもしれない。たがいたのかもしれない。自助や共助が不足している。三つの問題は災害後にも関係する。高齢者は身体的な問題から災害関連死のリスクが他の年代より高く、情報に疎いと行政支援がタフティネットから漏れ

## 高齢者の避難を考える 西日本豪雨から

兵庫県立大 木村 玲欧准教授

### ① 識者インタビュー



きむら・れお 名古屋大助教などを経て、2011年から現職。岡山県が西日本豪雨での初動対応などを検証するため設置した「災害検証委員会」メンバー。京都大学大学院情報科学研究科博士後期課程修了。東京都出身。

たがいたのかもしれない。自助や共助が不足している。三つの問題は災害後にも関係する。高齢者は身体的な問題から災害関連死のリスクが他の年代より高く、情報に疎いと行政支援がタフティネットから漏れ

れていた人が地域を離れて孤立するケースもあり、注意と支援が欠かせない。災害時は、たとえ迫っていてもまだ大丈夫という「楽観主義バイアス」が強く働く。高齢者はその傾向が強い可能性がある。しかし災害は100年に1度でも起きたら命も財産も奪われる。災害の前では誰もが無防備だという気持ちで臨まなければならない。「自助」の面では、まず警報に関する意識を改めるべきだ。大雨警報が発せられた時点で非日常になったと頭を切り替える。徒競走の「よいい、どん」と同じで、警報が出た段階で「よい」と身構える。テレビをつけたり、懐中電灯や防災袋を玄関に置いたり。そして避難情報などをこまめにチェックする。これを高めていく責務がある。

21世紀は地震が活動期に入ったとされ、地球温暖化で風水害も頻発する可能性が高い。私たちは他のエリアの災害を自らに置き換えて考える「わがごと意識」を持ち、今回の教訓を家族ぐるみ、地域ぐるみで次の防災につなげなければならぬ。行政は高齢者が犠牲となった原因を真摯に検証するべきだ。災害対応の中核であるとの自覚を持ちながら「自助」「共助」「公助」の力を高めていく責務がある。

# 被災地だけの問題ではない災害時避難

## ① 身体的な問題

- ・ 2階に行くことができない要介護者の存在
- ・ 真備町死亡者51人のうち、災害時に支援が必要な避難行動要支援者は42人(倉敷市の要支援者名簿に登録)
- ・ 51人のうち43人が屋内で発見、うち42人が住宅1階部分で発見(平屋21人・2階建以上21人)

## ② 情報活用の問題

- ・ 高齢者にはインターネット、SNS、テレビのデータ放送などに対応できない人がいた
- ・ 警報や避難に関する情報が多様化していて、理解できないまま災害に巻き込まれた

## ③ 地域力の問題

- ・ 人口減少や高齢化の中、独居や高齢夫婦世帯に対して、地域を挙げての安否確認や避難誘導がなかなかできなかった
- ・ 声かけで多くの住民が避難した一方で、地域のセーフティネットから漏れてしまった人がいた

→災害後にも①～③が問題になっている

# 家屋被害がある世帯でも避難行動とらず

Table 1 Cross table of evacuation behavior by the levels of housing damages

家屋被害		避難行動					
		「避難」としては特に行動していなかった	安全な自宅などに積極的に留まっていた	自宅の上階などに避難をした	近隣の安全だと思われる建物に避難をした	避難所に避難した	その他
大雨警報時	全壊	34%	9%	21%	7%	21%	8%
	大規模半壊	33%	6%	25%	10%	14%	12%
	半壊	26%	9%	25%	6%	24%	10%
	一部損壊	53%	0%	27%	7%	13%	0%
		$\chi^2(15) = 29.71, p = .013$					
避難指示(緊急)時	全壊	20%	8%	21%	9%	30%	11%
	大規模半壊	21%	7%	24%	10%	21%	16%
	半壊	21%	8%	24%	8%	30%	9%
	一部損壊	13%	13%	38%	13%	13%	13%
		$\chi^2(15) = 17.08, p = .314$					

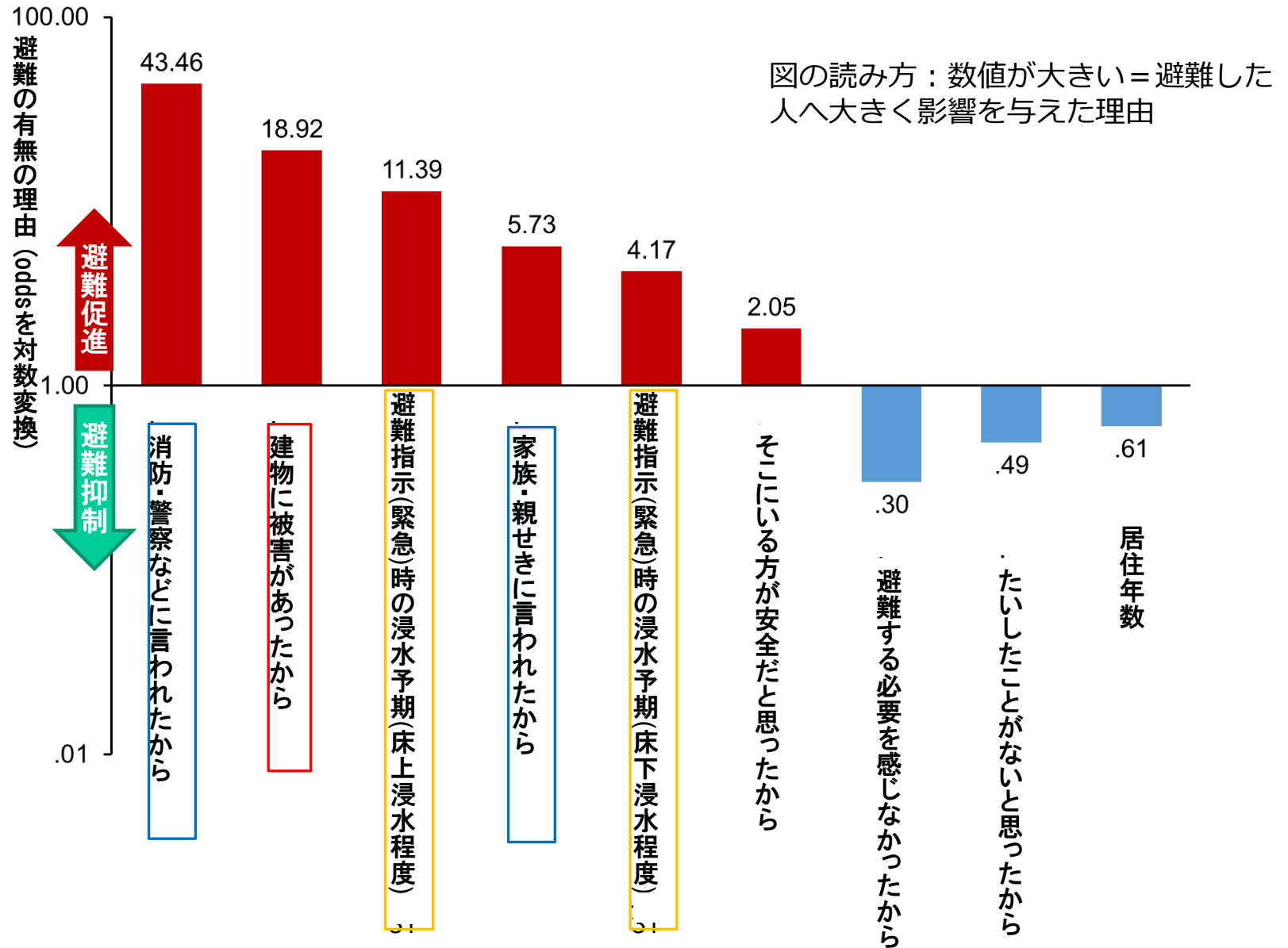


家屋被害が生じた地域の住民の場合でも、大雨特別警報から避難指示(緊急)へ状況が悪化することで、避難行動を全く取らない割合は減るものの、特に行動しない人が一定数存在している

岡山県『平成30年7月豪雨災害での対応行動に関するアンケート』(2018年11月~12月、岡山県の「被災者台帳」に登録されている全6,644世帯に調査を実施、有効回答 n=3,765 (有効回収率56.7%))

Ohtomo, Kimura and et.al.(2019) The Determinants of Residents' Evacuation Behavior in the Torrential Rain in Western Japan in 2018: Examination of Survey Data of Victims in Okayama Prefecture, J. of Disaster Research, 15(7), pp.1011-1024

# 避難指示（緊急）時の避難選択理由

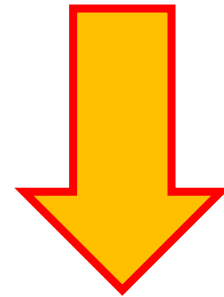


「自然」が変わってしまった今、

「個人・組織・社会」も変わらなければならない。

- 21世紀前半は地震・異常気象などの「大災害時代」になる
- これからを生きる人々にとって、災害は「めったに起きないもの」ではなく「頻繁に発生し、その度に命を脅かすもの」という認識を持つべき

「わがこと意識」 (⇔他人事)

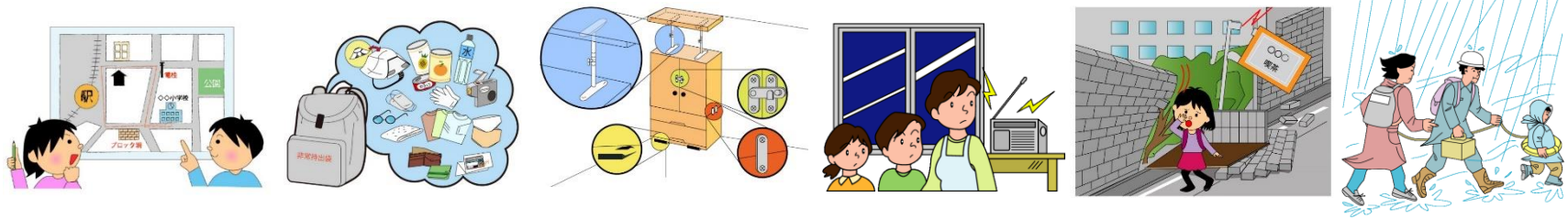


- 自分たちに身近なこととして、自分たちに引き付けて考えること
- ある事柄について、それが自分たちに直接関係することだけでなく、それが自分たちそのもののことのように意識すること

# 二段階で「わがこと意識」を上げる

## 1. 住民1人1人に対する働きかけ

- ・ハザードマップ等による災害理解・危険認識
- ・かさ上げ、家電・家具の浸水対策、安全確保行動基準の決定、避難場所・経路の確認、土のう・止水板・非常持出袋・非常食等の準備などの災害対策

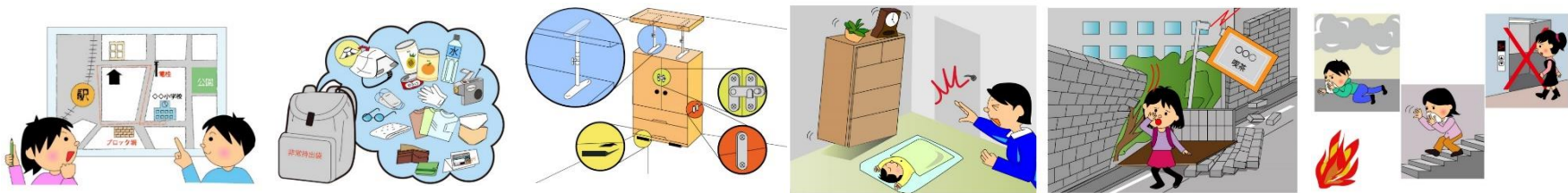


## 2. 地域の防災活動の中核的人物への働きかけ

- ・共助で地域を守るための地区防災計画等の計画づくり
- ・本部立ち上げ、情報収集、避難呼びかけ、避難行動支援、安否確認、救助救出、物資調達、避難所開設・運営等の災害対応



# 何も知らなければ「すべてが想定外」



自然現象の発生    現象の大きさ    日頃のそなえ    直後の適切行動    人・物の被害    救助救出    生活支障    生活再建    復旧復興    ……



想定内

想定外



想定内

想定外